

信長の棺（上・下巻）

加藤 廣 著

豊臣秀吉・信長が、本書ではどのように描かれているのかと興味津々で読み始めました。著者は、後に「秀吉の枷」、「明智左馬助の恋」を書いています。実は、先に「秀吉の枷」を読んでいて、同時に本書を読み始めたのですが、本書の方が、緊迫感があり、信長・信吉の内容に反発しつつも、先に読み終えてしまいました。信長側から書かれた本書と秀吉側から書かれた「秀吉の枷」。それぞれの見方に人間の裏表を見た感じでした。

本書は、信長の側近であった太田信定が信長の一代記「信長公記」を記すため、本能寺の変の後に忽然と消えた信長の遺骨の行方についてゆきます。信長の悪行の裏に隠された真実、秀吉の出生の秘密。なぜ秀吉は本能寺の変の後、明智光秀を倒せたのか……。本書ならではの新しい見解が私の秀吉像を変え、歴史上の人物を「生身の人間」として蘇らせてゆきました。さらに様々な人に接し、真実を突き止めていく信定。命に関わる程の話を聞き出すために同じく命懸けで対峙する信定。信長の遺骨に手が届いたと思ったクライマックス……。ドキドキ、ハラハラしながら歴史フィクションとして楽しめました。中でも特に気になったことは、信長を裏切った秀吉の最期の描写で、苦しみながら死を迎えたという一節。自分が一番その悪行を知っている。だから、絶対にやってはいけない（と自分で思っている）ことは、やらないでいこうと思えました。

Y・C



文藝春秋

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞